

総論 良寛——その生涯と書——〔増補〕

小島正芳

一、良寛の書の魅力

良寛の書の魅力は、いったいどこにあるのであろう。その書の魅力はいくつか挙げることができると思うが、一つは、やはり純な精神、超俗の気品が作品に溢れているところにあるのではなからうか。夏目漱石は、大正三年（一九一四）一月七日から十二日まで東京朝日新聞に連載した「素人と黒人」という評論の中で、「良寛は嫌いなもののうちに、詩人の詩と書家の書を平生から数えてゐた。詩人の詩、書家の書といへば本職という意味から見て是程立派なものはない筈である。それを嫌ふ上人の見地は、黒人の臭を悪む純粹でナイーブな素人の品格から出てゐる。心の純なところ、気の精なるあたり、そこに摺れ枯らしにならない素人の尊さが潜んでゐる。」と述べている。

良寛の三嫌の話は有名であるが、三嫌とは漱石の挙げている詩人の詩と書家の書、それに膳夫の調食（料理人の料理）といわれている（鈴木文台）。いずれもプロの作品である。専門家はそれが本職であるから、技術の修練も徹底して行われ、見た目もきれいな作品を作る。しかし、漱石はそのような専門家の作品は「玄人の臭気」があり、人間の真情のこもっていない「摺れ枯らし」の作品が多いと述べているのである。それに比べると良寛の作品は、それら玄人の作品と較べると精妙さという点では劣る面もあるかもしれないが、その作品には純真で高貴な精神が躍如として、見る人の心をなごませてくれるものがある。漱石が良寛の書を高く評価しているのは、まさにこの純粹でナイーブな品格なのであろう（図版No.121）。

この純粹な品格というのは、出そうとして出るものではあるまい。良寛の生き方、生活がそのまま書ににじみ出たものであろう。良寛の書は、長年にわたる坐禅修行によつて、物欲も名利も捨て去り、「真人」として生きた良寛のありのままの姿のあらわれなのである。そこには、澄みきった精神が溢れている。北大路魯山人は、昭和十三年六月「魅力と親しみと美に優れた良寛の書」（『良寛遺墨』所載）の中で、「良寛様の書



夏目漱石の画賛（部分）



夏目漱石の俳句



北大路魯山人の「良寛詩」の筆筒



漢詩 六曲屏風半双 日々日々

は質からいつても、外貌からいつても、実に稀にみるすばらしい良能の美書であつて、珍しくも、正しい嘘のない姿である。いわゆる真善美を兼ね具えたものというべきであらう。書には、必ず人格が反映しているもので、人格が反映していない人格以上の書の生まれ出ることなど、まずもつてあり得ない」と、良寛の書と人格との関わりについて鋭い指摘をしている。やはり、良寛の書のいいところは、良寛という人のいいところの反映なのである。良寛の温かな品格を持つ親しみやすい書は、いつもほほえみをたたえて人々と接し、清貧の生活でも強い精神を持つて、民衆とともに歩んだ良寛の生き方の反映なのである（図版No.136）。

良寛の書の中に見られる芸術性の高さも、見逃すことはできない。変転自在の布置、リズム、点の使い方など章法の巧みに驚かされる。特に乙子神社時代の円熟した書は、ゆつたりとしたリズムで飄々と単体で右に左にと変化しながら、バランスをとつてまとめ、各行が余白を生かして相互に響きあつて、全体として美しいリズムとハーモニーを醸し出している。そして、これだけ千変万化の妙を見せていても、それが人為の技と思えないほど自然に書かれているのには驚かされる。

良寛は、楷書では陶弘景の『瘞鶴銘』、黄山谷の『廬山七仏偈』、草書では、懷素の『自叙帖』、『千字文』、王羲之の法帖『澄清堂帖』、孫過庭の書、尊田親王の『梁園帖』（『梁園宝帖』）、それに張旭、高閑、張芝などの書も学んだことが知られている。また、仮名では小野道風の『秋萩帖』を学んでいる。良寛は、これらの法帖を熱心に学び、古典の書法を体得していった。したがつて、その書は一気呵成に自由に揮毫しても、けつして上滑りになつたりしていない。良寛の書は、一度書法を手に入れても、それにとらわれず、自由に自分の感性で新たな世界を創造したものといえる。

良寛の最晩年の書の美しさは、まことに絶妙と賞嘆するよりほかにない。その書は、幽玄というか、外へあらわれきれないで、内に無限の含蓄と余韻を秘めた気品の高い精神的な世界であつた。天保元年（文政十三年十二月十日より改・一八三〇）十二月二十七日、良寛が亡くなる直前にしたためた山田杜皐宛書簡は（『良寛遺墨集』図版No.127）、消え入るような細い線で、よろめくように書かれている。線も一部ふるえているところも見られる、かなり体力が衰えていることが窺える。しかし、その書は神韻縹渺とした線の妙味があり、とらわれない無為自然の趣がある。良寛が最晩年に行きついた書境を、そこに見ることができると気がする。また、亡くなる直前に書いた「草庵雪夜作」（図版No.80）は、絶品というほかない。

良寛の書は、青年期にやしなつた精神性の高い独自のスタイルに、『自叙帖』や『秋萩帖』など古典の古格を取り入れ、銘酒が発酵するようにゆつくりと完成されていった。良寛の書は、日本書道史上燦然と輝く



〔釈文〕

林暗暁

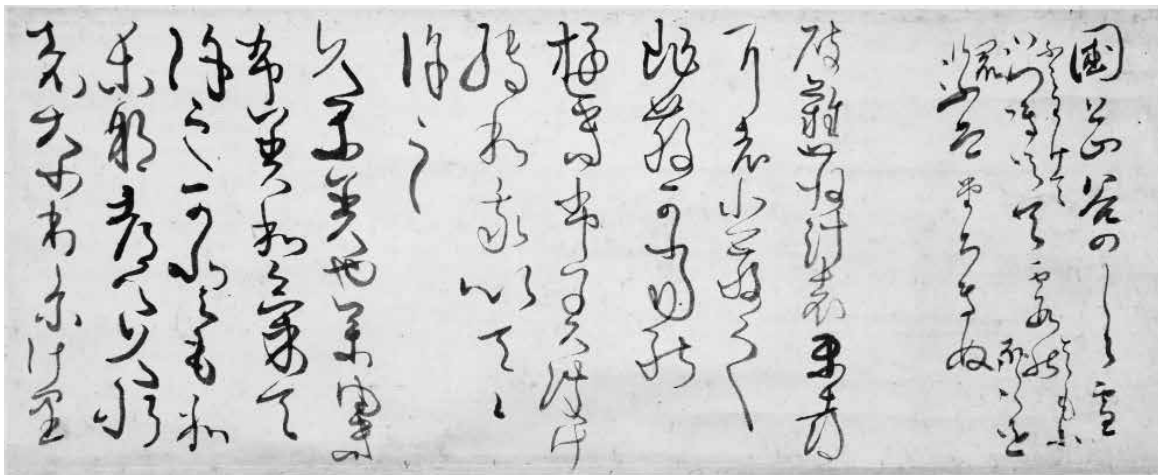
梵響

〔読み下し〕

林は暗く 暁の梵響く

〔解説〕

五合庵に住庵している頃の良寛を描いた自画像である。
真言宗の古刹・国上寺の江戸時代の記録には「一 鐘楼 二間四方」とある。
ここから梵鐘の音が林に鳴り響いていたのであろう。良寛は、国上寺の本堂付近の風景が好きで、よく訪れていた。良寛は絵ごころを持った人で、線描でよく絵を描いた。手には、師・国仙和尚から与えられた烏藤の杖がある。良寛が早朝まだ暗いうちに五合庵の山道を登り、国上寺の塔頭のあたりにさしかかると、鐘楼から梵鐘の響きが聞こえてきたのであろう。この作品はその時の印象を絵に描き、賛を添えたもの。賛は、良寛壮年期の素朴な趣のある楷書である。



〔釈文〕

国上山谷のしら雪

ふみわけて霞とともに

君はたちきぬ

（鵲斎）

破難散計者 末都

耳者悲散之

非散可當能

遊幾布美波計

轉和我以天々

許之

（良寛）

〔読み下し〕

花咲けば待つには久し久方の

雪踏みはけて我が出でて来し

〔釈文〕

久閑美也萬 由幾

布美和氣天

許之可登毛

閑那都む部久

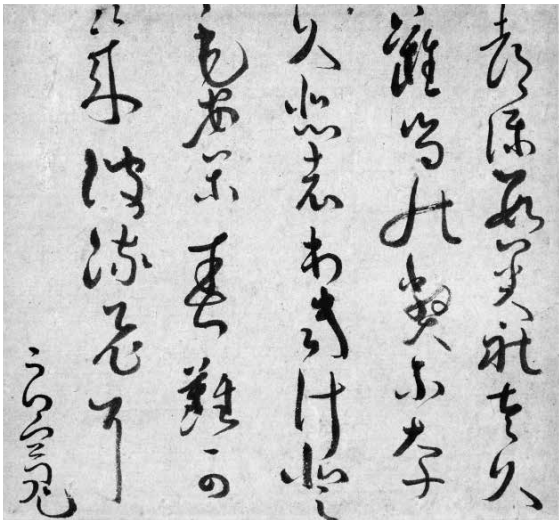
者奈利爾計里

（良寛）

〔読み下し〕

国上山雪踏みわけて来しかども

若菜摘むべく身はなりにけり



〔解説〕

良寛が真木山（現・新潟県燕市）の医師・原田鵲斎（有則）と唱和した和歌。鵲斎は、三峰館で良寛と共に学んだ人で、良寛が帰郷すると、親しく交流した。この和歌は、上杉篤興編の『木端集』に所載されているが、真蹟が紹介されるのは初である。享和二年（一八〇二）頃の春、良寛が鵲斎の家を訪ねた時唱和されたものと思われ、『木端集』には、

有則がもとに宿りて

鳥は鳴く木々の梢に花は吹く

我も浮世にいざ交りなむ （良寛）

是が返し有則

花鳥にまじるといはば春の日

の暮なん後は我いかにせん （有則）

という二人の唱和の和歌が所載されている後に、本歌が連記されている。

筆蹟を見ると、良寛が『秋萩帖』を学んで間もない五合庵時代初期（四十五歳頃）の作と思われる。「つば重」は、葉がハート形なのが特徴である。良寛は、重の花が好きで、野原で摘んで三世の仏に奉ることもあった。

〔釈文〕

都保数美礼 左久

難留能弊爾 奈

久悲者利 幾計登

毛安閑春 難可

幾波流飛耳

良寛

〔読み下し〕

つば重咲くなる野辺に鳴く雲雀

聞けどもあかず永き春日に